

動詞 fahren と文構造

—— ドイツ語の文構造についての一考察 ——

片 岡 宜 行

1. はじめに

動詞 fahren は、ドイツ語を学ぶ学習者にとって最もなじみが深い語であるとともに、最も厄介な存在でもあるだろう。初級文法でまず出会うのは次のような用法である。

(1) Ich fahre nach Berlin. (私はベルリンへ行く。)

この fahren は、gehen と異なって「乗物」で移動するときに用いられるということを学習者はまずはじめに学ぶ。(1) では移動するのは「私」、つまり人物である。しかし、学習者はまもなく「乗物が移動する」場合に用いられる fahren に出会うことになる。

(2) Der Zug fährt durch den Tunnel. (列車がトンネルを通り抜ける。)

この fahren はさらに、「乗物」を対格目的語にとり「～を運転する」という意味でも用いられる (3)。一方 (4) では対格目的語に「人物」をとり、「ある人をある場所まで乗物で送る」という意味で用いられている。ついには (5) のように fahren を用いた文が「～をぶつける」と訳されることもあると知ると、学習者は大いに混乱することだろう (例文 (3)～(5) は『小学館 独和大辞典』より)。

(3) einen Volkswagen fahren (フォルクスワーゲンを乗り回す)

(4) jn. mit dem Auto in die Stadt fahren (～を車で町まで送る)

(5) das Auto gegen eine Mauer fahren (車を壁にぶつける)

fahren は、(1) や (2) のように sein 支配の自動詞として用いられるなど、移動動詞としての特徴をもつ一方で、(3)～(5) のように対格目的語をとって他動詞として機能することもある。fahren がこのように多様な用法をもつ第一の要因は、当然のことではあるが、「乗物を用いた移動

を表す」というこの動詞の性質にある。¹ このため必然的に「移動する人物」や「乗物」のほか、「乗物を用いて移動させられるもの」や「着点（方向）」などの意味的な要素が文に現れることになる。このような要素が fahren の伴う文成分に配分されることによって多様な用法が作りだされる。

本稿の目的は、この fahren のとる文構造を見通しよく整理することである。その際、どのような意味的な要素が現れるか、またそれが文成分にどのように配分され、どのような文意味が成立するかという観点から検討する。

3.1. でみるように、ドイツ語の文構造は、基本的な構造を縮小もしくは拡張することによって陳述の焦点をずらしたり、文意味を変化させたりする可能性に富んでいる。動詞 fahren のとる文構造の特徴はこの動詞に特有のものではなく、ドイツ語の文構造そのものがもつ特徴の中に位置づけられるべきものである。

以下、まず2ではドイツ語の結合価辞典において fahren の用法がどのように記述されているかを概観する。fahren がどのような文成分を伴い、どのような文構造をとるか、また、その結果どのような文意味が成立するかといった疑問に対して、結合価辞典がどのような情報を与えてくれるのかを確認したい。続いて3では、ドイツ語の文構造がもつ特徴についてみたあと、この特徴との関連を考慮に入れながら fahren の用法を整理する。

2. 結合価辞典における記述

ここでは、ドイツで刊行されている結合価辞典において動詞 fahren のとる文構造がどのように記述されているかをみていきたい。取り上げる辞典は以下のとおりである（詳細については論文末尾の「参考文献」を参照）。

Helbig, G. / Schenkel, W. (1991): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben.

Sommerfeldt, K-E. / Schreiber, H. (1996): Wörterbuch der Valenz etymologisch verwandter Wörter: Verben, Adjektive, Substantive.

Schröder, J. (1993): Lexikon deutscher Verben der Fortbewegung.

Schumacher, H. et al. (2004): VALBU — Valenzwörterbuch deutscher Verben.

Helbig / Schenkel (1991) では fahren の用法が5つに区分されているが (S. 239f.)、このうち第5番目のものは「髪に手をやる」などの意味を表す場合に用いられるものなのでここでは除外する。その他の4つの用法についての記述を簡略化した形で示すと以下のようになる。²

¹ 一般に「乗物」とみなされるものを用いた移動のほか、「スキーで走る (Ski fahren)」や「メリーゴーラウンドに乗る (Karussell fahren)」といった場合にも用いられる。

² () は、カッコ内の要素が随意的共演成分であることを示す。

- ① 乗物が移動する 主格 [無生の乗物] (前置詞句 [方向])
 Das Auto fährt nach Berlin. (車がベルリンに向かう。)
- ② 人物が移動する 主格 [人物] (前置詞句 [方向]) (前置詞句 [無生])
 Er fährt mit dem Wagen nach Dresden. (彼は車でドレスデンへ行く。)
- ③ 乗物を運転する 主格 [人物] (対格 [無生])
 Der Kollege fährt einen Wartburg. (同僚はヴァルトブルクに乗っている。)
- ④ 輸送する 主格 [人物・機関・無生] 対格 [有生・無生] (前置詞句 [方向])
 Der Arbeiter fährt das Holz. (労働者が材木を運ぶ。)
 Die Firma fährt die Möbel nach Berlin. (商社が家具をベルリンへ運ぶ。)
 Der Autobus fährt die Kinder. (バスが子供たちを運ぶ。)

この記述からわかることは、前置詞句がすべて随意的共演成分であり、文構造の基本をなすのは主格ないし対格の名詞句であるということである。そして、その主格・対格名詞句を占めるのは、移動する人物や物、あるいはその移動をもたらす人物や物である。一方の前置詞句は移動の方向もしくは移動の手段を表す。多様な文構造をとる fahren ではあるが、統語的にみれば中心となる主格・対格に随意的な前置詞句が付加されるという構造であり、それぞれに異なった意味的な要素が配分されることがわかる。ただし、この記述において fahren の多様な用法がすべて網羅されているとはいえない。

Sommerfeldt / Schreiber (1996) の記述はさらに簡単なものになっており、fahren の用法は自動詞 (以下の (a)) と他動詞 (以下の (b)、(c)) の2つに区別されているのみである (S.25f., 51)。自動詞の方は実際にはさらに2つの用法に区別されているが、これは「乗物」が陸路を移動するか水路を移動するかという基準で分けられたものに過ぎない。

- (a) Die Straßenbahn fährt zum Bahnhof. (路面電車が駅に向かう。)
- (b) Der Chauffeur fährt den Mercedes in die Garage. (運転手がメルセデスをガレージに入れる。)
- (c) Der Bus fährt die Urlauber zum Hotel. (バスが休暇旅行者たちをホテルに運ぶ。)

この辞典は、見出し語と派生語の関係にある動詞や名詞の結合価を同時に記述したものであり、各動詞そのものとの文構造については必ずしも詳細な記述がなされていない。fahren のとる多様な文構造を整理するという本稿の目的からすれば、有益な情報が得られるとはいいたい。しかし、基礎動詞が前つづりを伴う分離動詞をも射程に入れて文構造を分析する際にはこの辞典から示唆が得られると思われる。³

J. Schröder によるドイツ語の移動動詞の辞典 (1993年) では、fahren の用法は5つに分類さ

³ 岡本他 (2003)、吉田他 (2001:123ff.) を参照。

れている (S. 35ff.)。Helbig / Schenkel との違いは、まず「乗物が移動する」場合を、移動の起点・着点を示す前置詞句などの有無によって2つに区分していることである。

- (a) Das Auto fährt. (車が走っている。)
- (b) Das Auto fährt in die Stadt. (車が町へ向かう。)

(a) のように前置詞句がない場合については、観察時点において乗物が移動中であることが明記されている。つまり、方向を示す要素が表示されないことにより、「ある方向への移動」から「継続的な出来事としての移動」に文意味がシフトするといえる。また、距離を示す対格名詞が現れる場合を独立した用法として記載している点も Helbig / Schenkel と異なる点である。この場合は移動距離などに焦点をあてた文意味となる。

- (c) Wir sind jetzt schon 200 km gefahren. (私たちはもうすでに200キロメートル走った。)

このように、この辞典からは文成分の結合の可能性と文意味の変化についてより豊富な情報が得られる。なお、これは移動動詞のみを対象とした辞典であるため、「あるものを運搬する」という意味の用法は記載されていない。

さらに詳しく fahren の用法を分類しているのは Schumacher et al. (2004:368ff.) である。この辞典では fahren の用法が sein 支配で用いられる場合と haben 支配で用いられる場合に分けて記述されているが、それぞれが9種類と4種類の用法に分類されている。そのうち乗物での移動に関わる意味をもつものはそれぞれ7種類と3種類であり、文成分の種類や成立する文意味などによって詳しく分類されている。例えば、次の (a) のように人物が滞在を目的として移動する場合については、ある目的地に向けた単なる移動とは別に項目を設けて記載されている (カッコ内の日本語訳のあとに記したローマ数字と算用数字は、この辞典における分類番号を示す)。

- (a) Im nächsten Urlaub wollen wir an die See fahren. (私たちは次の休暇には海に行くつもりだ。I 5)

また、対格目的語に「速度」など様々な要素をとるものや「様態」を伴うものなどがそれぞれ個別に記載されている。

- (b) Wie viel Stundenkilometer fährt der Eurocity? (ユーロシティは時速何キロで走るのか? I 4)
- (c) Frau Müller fährt immer sehr vorsichtig. (ミュラーさんはいつも非常に慎重に運転をする。I 7)

対格目的語に「乗物」をとり方向を示す要素が現れない場合については、意味が「ある乗物を使用または所有する」とされており、文成分の削除に伴う文意味の変化に配慮がなされている。

- (d) Viele Jungen träumen davon, später einen Truck zu fahren. (多くの男の子たちは将来トラックに乗ることを夢見る。II 2)

この辞典では文成分の結合の可能性とその結果成立する文意味について、非常に詳しい情報が得られる。ただ、この詳細な記述によって fahren のとりうる文構造の全体像が容易に把握できるとはいいがたい。より見通しよく fahren のとる文構造を整理するには、静的な文構造の記述にとどまらず、基本的な構造にどのような文成分が付加できるか、また基本的な文構造からどのような文成分が削除できるかという観点から用法を体系化することが必要であると思われる。またその際、どのような意味的な要素が現れるのか、またその結果どのような文意味が成立するのかという観点から用法を整理することが有効であろう。次の3では、ドイツ語の文構造のもつ一般的な特徴をみたくて、以上のような観点から fahren の用法を整理してみたい。

3. 動詞 fahren と文構造

3.1. ドイツ語の文構造の特徴

ドイツ語は、ある動詞のとる基本的な文構造を縮小もしくは拡張することにより、文意味に変化をつける可能性に富んでいる。例えば成田 (2004:79) は次のような例を挙げている。

- (6) „Was machst du in den Ferien, wenn es regnet?“ — „Dann lese ich.“ (「休暇滞在先で雨が降ったらどうするの？」 — 「その時は本を読むよ。」)

動詞 lesen は本来は他動詞であり、対格目的語とともに用いられる。しかしここでは目的語なしで用いられており、「特定の対象を読む」という意味ではなく、より一般的な「読書をする」という意味になっている。これは成田によれば、他動詞を対格目的語なしで用いることにより、「行為の対象から目を逸らせ、行為そのものに焦点を合せた表現」にしたものである。この例は基本的な文構造を縮小したものであるといえる。それとは逆に、本来動詞の結合値に含まれない成分を付加することによって文構造を拡張できる場合もある。

- (7) sich die Füße wund laufen (走りすぎて足をいためる)

動詞 laufen は本来は自動詞であり、対格目的語をとらない。しかしここでは対格名詞句である

die Füße と結果を表す形容詞 wund、さらには与格の再帰代名詞 sich とともに用いられている。そして文意味は、「走る」という動作そのものではなく「足をいためる」という結果に比重を置いたものとなっている。こちらは、結果を表す要素の付加によって基本的な文構造を拡張し、結果に陳述の焦点を合わせたものということができよう。吉田他 (2001:120f.) の挙げるいわゆる「搬動語法」の例も、このような文構造拡張の一つの形態である。

(8) Gestern abend habe ich ihn unter den Tisch getrunken. (昨晚私は彼を飲みつぶした。)

ここでは動詞 trinken の本来の項でない対格代名詞 ihn と方向を示す前置詞句 unter den Tisch が出現することによって、移動の意味をもたない動詞 trinken のもて「彼をテーブルの下へ移動させる」という文意味が成立している。Zaima (1987:35) の挙げる次のよく知られた例においても、schütteln「ゆさぶる」という動詞を用いた文が「ゆすぶり落とす」という意味を獲得している。

(9) Er schüttelt die Äpfel vom Baum. (彼はリンゴを木からゆすぶり落とす。)

なお、『小学館 独和大辞典』では、動詞 klingeln「ベルを鳴らす」の次の用法が、本来の自動詞の用法とは別に、他動詞の用法として記載されている。

(10) jn. aus dem Bett klingeln (ベルを鳴らして人を起こす)

しかしこれは、klingeln に他動詞の用法があるというよりも、本来の自動詞の用法が拡張されたものと解するべきであろう。ここまでみてきた例についてまとめると、(6)では「行為の対象」の削除、(7)では「結果」とその「結果を被るもの」の付加、また(8)~(10)では「方向(着点・起点)」と「移動させられるもの」の付加によって文意味が変化している。ドイツ語ではこのような形で、特定の意味上の役割をもつ文成分が削除または付加され、基本的な文構造が縮小または拡張されることがある。

動詞 fahren のとる文構造を多様なものに行っている要因も、ドイツ語の文構造のもつこの特徴であると思われる。また、多様な用法を基本的な文構造が変化したものにとらえることで、fahren のとる文構造をより見通しよく整理することができる。以下、このような観点から fahren の文構造を整理してみたい。

3.2. fahren が伴う意味要素

前節では、ある動詞のとる基本的な文構造に対して、「行為の対象」を表す要素を削除したり、

あるいは「結果」や「結果を被るもの」を表す要素を付加したりすることで文意味が変化することをみた。本稿では、このような文を構成する意味上の構成要素を仮に「意味要素」と呼ぶことにする。fahren の文構造を整理するにあたり、ここではまず、どのような意味要素が fahren のもとで現れるかをみる。

fahren が乗物を用いた移動を表すことから、この動詞のもとで現れる意味的な要素としては、「乗物」やその乗物を用いて移動する「人物」がまず考えられる。しかし、例えばこの「乗物」についてみると、語彙的な意味は「乗物」であっても、その要素が文中で果たす役割は常に同じではない。

- (11) Ich fahre mit dem Auto an die See. (私は車で海辺へ出かける。)
- (12) Das Schiff ist in den Hafen gefahren. (船が入港した。)
- (13) Ich fahre das Auto in die Garage. (私は車をガレージに入れる。)

(11) の場合、Auto は移動の手段と考えられる。しかし (12) の Schiff は「手段」ではなくそれ自体が「移動するもの」としてとらえられている。これは、意味役割概念でいえば「対象」となる。⁴ Schröder (1993:36) は (12) の Schiff のようなものを「道具格」とみなしているが、これは適切であるとはいえない。また (13) の Auto は「移動させる」という行為の「対象」となっている。一方、fahren のもとで現れる「人物」もまた複数の役割を文中で果たす。

- (11) Ich fahre mit dem Auto an die See. (私は車で海辺へ出かける。)
- (14) Ich fahre ihn an die See. (私は彼を海辺へ送る。)

これら二つの文にそれぞれ主格代名詞として現れる ich は、文中において果たす役割が異なっている。(11) の ich は「移動するもの」である。これに対して (14) では、「移動するもの」としての役割を担っているのは対格代名詞 ihn の方であり、ich はその移動をもたらす「動作主」としての役割を果たしている。

文の意味的な構造は、各要素が文中でどのような役割を果たすかという観点から記述されるものであり、意味要素の規定に際しては「乗物」や「人物」といった語彙的な意味よりも、各要素の役割に着目することが必要となる。したがって、本稿で「意味要素」と呼ぶものは、より一般的な用語に従えば意味役割の概念に相当するであろう。本稿ではこの意味役割の概念も参考にしつつ考察を進める。しかし、本稿で扱うのは「移動するもの」や「移動をもたらすもの」など、fahren の用例に認めることができる要素に限定する。したがって、本稿で意味要素と呼ぶものが一般的な意味役割の概念に一致するかどうかについては見解を保留としたい。⁵

⁴ 吉田他 (2001:74f.) を参照。

⁵ 以下では意味要素を 〈 〉 で表示する。

ここまでの例に現れた〈移動するもの〉についてみると、主格として現れたものが (11) の ich と (12) の Schiff であり、対格として現れたものが (13) の Auto と (14) の ihn である。つまり、主格・対格のいずれによって実現される場合であっても、有生と無生のどちらでもありうるということがわかる。一方で、〈移動をもたらすもの〉として文中に現れたのは (13) と (14) の ich であるが、この〈移動をもたらすもの〉もまた、無生の場合がある。

(15) Der Autobus fährt die Kinder. (バスが子供たちを運ぶ。)

したがって、〈移動するもの〉と〈移動をもたらすもの〉のいずれもが、有生と無生のどちらでもありうるということがわかる。ここで、これまでに挙げた例 (11)～(15) に現れた意味要素をまとめておく。

- (11) Ich fahre mit dem Auto an die See. 〈移動するもの〉〈手段〉〈着点〉
(12) Das Schiff ist in den Hafen gefahren. 〈移動するもの〉〈着点〉
(13) Ich fahre das Auto in die Garage. 〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈着点〉
(14) Ich fahre ihn an die See. 〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈着点〉
(15) Der Autobus fährt die Kinder. 〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉

他に fahren とともに現れる主な意味要素としては、〈起点〉〈経路〉〈様態〉〈結果〉を挙げることができる。これらの要素が現れた例を、意味要素の構成とともに挙げておく。

- (16) Wir fahren mit dem Zug von Leipzig über Berlin an die See. (私たちは列車でライプツィヒからベルリンを経て海へ行く。)
(17) Das Auto fährt elektrisch. (その車は電気で走る。)
(18) Er hat seinen Wagen schrottreif gefahren. (彼は運転を誤って車をめちゃくちゃに壊した。)

- (16) 〈移動するもの〉〈手段〉〈起点〉〈経路〉〈着点〉
(17) 〈移動するもの〉〈様態〉
(18) 〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈結果〉

3.3. fahren のとる文構造

前節でみた意味要素が fahren とどのように結びつくのかという観点から、fahren のとる文構造を以下にまとめる。用例は主に『小学館 独和大辞典』から取ったものである。

fahren のもとで現れる意味要素のうち最も基本的なものは〈移動するもの〉であろう。この〈移動するもの〉を表す文成分は、2でみた Helbig / Schenkel (1991) による fahren の4つの用法のうち、③で随意的共演成分となっているほかは、すべてにおいて必須の文成分となっている。この事実からも〈移動するもの〉が最も基本的な意味要素であることがみてとれる。次に重要な位置を占める意味要素は、Helbig / Schenkel の③と④において必須の文成分の意味をなす〈移動をもたらすもの〉である。そこで、最も基本的な〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴う場合と伴わない場合に用法を分け、〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴わずに現れる場合の文構造を最も基本的なものと仮定する。このとき〈移動するもの〉は主格名詞句として現れる。また、随意的な要素として〈空間規定〉が前置詞句などに現れる。⁶

〈移動するもの〉〈空間規定〉

Wann fährst du in die USA? (君はいつアメリカに行くのか。)

Auf der Autobahn fährt nur ein Auto. (アウトバーンを自動車が1台だけ走っている。)

Das Schiff fährt den Fluß aufwärts. (船が川をさかのぼる。)

ここで〈空間規定〉が〈着点〉である場合、文が結果を表す意味になることがある。

〈移動するもの〉〈着点〉

gegen einen Baum fahren (木に衝突する)

auf Grund fahren (船が座礁する)

また、同様に〈空間規定〉が〈着点〉である場合、主格名詞句の属性を表す文になることもある。

〈移動するもの〉〈着点〉

Dieser Bus fährt zum Bahnhof. (このバスは駅行きである。)

Das Schiff fährt nach Hamburg. (この船はハンブルク行きである。)

ここまでは〈移動するもの〉と〈空間規定〉が文を構成する例であったが、この〈空間規定〉に代わって〈様態〉などの要素が現れることがある。

〈移動するもの〉〈様態〉

elektrisch fahren (電気で走る)

im Schritt fahren (徐行する)

120km in der Stunde fahren (時速120キロで走る)

⁶ 〈起点〉〈経路〉〈着点〉を特に区別する必要がない場合は、まとめて〈空間規定〉として扱うことにする。

そのほか、走行の結果として生じるものなどの要素が現れる場合もあり、意味要素の結合の多様な可能性の一端を示しているといえる。

Kurven fahren (カーブを切る)
einen Rekord fahren (新記録で走行する)

なお、Auto fahren「車に乗る」のように fahren が乗物などを表す無冠詞の名詞とともに用いられる場合は、移動の様態を表していると考えられる。また、〈様態〉に類似した意味要素である〈手段〉が随意的な文成分に現れることがある。

Ich fahre mit dem Auto an die See. (私は車で海辺へ出かける。)

〈移動するもの〉以外の要素が現れず、「移動」という出来事に焦点を合わせた文になることもある。

〈移動するもの〉
Das Auto fährt. (車が走っている。)

次に〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴う場合であるが、このときは〈移動をもたらすもの〉が主格で現れ、〈移動するもの〉は対格で現れる。〈空間規定〉や〈手段〉は随意的な要素である。

〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈空間規定〉
Der Lastwagen fährt Holz zu der Baustelle. (トラックが材木を工事現場に運ぶ。)
jn. über den See fahren (～を湖の向こう岸へ渡す)

〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈手段〉〈空間規定〉
jn. mit dem Auto in die Stadt fahren (～を車で町まで送る)

先にみた〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴わずに現れる場合と同様に、〈空間規定〉が〈着点〉である場合、文意味が「結果」に転じる場合がある。

〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈着点〉
das Auto gegen eine Mauer fahren (車を壁にぶつける)

吉田ほか (2001:118ff.) によれば、移動動詞を用いて結果構文が作られる場合、本来〈着点〉が現れるべき位置に〈結果〉が現れる。それならば、次のような〈結果〉を含む場合も、これに類するものとしてとらえることができよう。

〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈結果〉

Er hat seinen Wagen schrottreif gefahren. (彼は運転を誤って車をめちゃくちゃに壊した。)

これは、3.1.の例文(7)と同様の構文である。また、〈着点〉が現れるべき位置に〈結果〉が現れると同時に、〈移動するもの〉が現れるべき位置に〈結果を被るもの〉が現れると考えるなら、次の例もこれと同様の意味構造をもつと考えることができる。

〈移動をもたらすもの〉〈結果を被るもの〉〈結果〉

jn. tot fahren (～をひき殺す)

『小学館 独和大辞典』では、この jn. tot fahren を自動詞の用法に区分する一方で、分離動詞 totfahren は他動詞とされている。また、einen Wagen schrottreif fahren という例が⁶、fahren の自動詞・他動詞両方の用例の中に挙げられている。このように、この場合の fahren が他動詞なのか、あるいは自動詞である fahren に本来の項でない対格が付加されたのかをめぐっては解釈に揺れがみられる。しかし、〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈着点〉という典型的な意味要素の構成を基本的なものとして仮定し、〈着点〉が〈結果〉に、また〈移動するもの〉が〈結果を被るもの〉に転じることがあるととらえることで、より明快な記述が可能になるとと思われる。

なお、先にみた、〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴わない場合と同様に、〈空間規定〉の位置に〈様態〉が現れることがある。

〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉〈様態〉

jn. gut fahren (～を巧みな運転で運ぶ)

また、〈空間規定〉の位置にある要素を削除することで他の要素を焦点化することも可能である。〈移動するもの〉が「乗物」である場合、これが焦点化されることによって「ある乗物を使用する」という文意味が成立する。

〈移動をもたらすもの〉〈移動するもの〉

einen Volkswagen fahren (フォルクスワーゲンを乗り回す)

einen gebrauchten Wagen fahren (中古車を運転する)

さらには、〈移動するもの〉を削除することにより、運転の様態、または運転者そのものを焦点化することもできる。

〈移動をもたらすもの〉〈様態〉

gut fahren (上手に運転する)

zehn Jahre unfallfrei fahren (10年間無事故運転をする)

〈移動をもたらすもの〉

Wer ist gestern gefahren, deine Frau oder du? (君と奥さんとどちらが昨日はハンドルを握ったのだ。)

いずれも、基本的な意味要素の構成から一部が削除され、残ったものが焦点化される現象ととらえることができる。

なお、ここまでに見たような、文意味が結果に変化したり、あるいは〈空間規定〉の位置に〈様態〉が現れたりするような事例は、〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴わない場合にもみられた。〈移動をもたらすもの〉が現れる場合と現れない場合を平行なものとしてとらえることで、fahren の形成する文構造がより明快に把握できるといえる。

4. おわりに

本稿では、特定の意味的な役割を担う要素（本稿で「意味要素」と呼んできたもの）のうちのどれが出現するか、またその際文がどのような意味をもつかという観点を中心に、動詞 fahren のとる文構造をみてきた。fahren のもとでの意味要素と文構造、また文意味の関係は以下のようにまとめることができる。

fahren のもとで主格・対格名詞句を占める意味要素は〈移動するもの〉と〈移動をもたらすもの〉である。このうち〈移動するもの〉のみが現れる場合はこれが主格名詞句を占める。また〈移動をもたらすもの〉も現れる場合にはこちらが主格名詞句を占め、〈移動するもの〉は対格名詞句に現れる。

1. 〈移動するもの〉のみが現れる場合

主格 = 〈移動するもの〉

※ 〈空間規定〉〈手段〉は随意的な要素であり、前置詞句などに現れる。

※ 〈移動するもの〉は「有生」「無生」のいずれの場合もある。

Ich fahre mit dem Auto an die See. (私は車で海辺へ出かける。)

Das Schiff ist in den Hafen gefahren. (船が入港した。)

※ 〈空間規定〉が〈着点〉である場合、文意味が結果・属性に転じる場合がある。

Das Auto ist gegen einen Baum gefahren. (車が木に衝突した。)

Das Schiff fährt nach Hamburg. (この船はハンブルク行きである。)

※ 〈空間規定〉の位置に〈様態〉などの要素が現れることがある。

Das Auto fährt elektrisch. (その車は電気で走る。)

※一部の意味要素を削除することにより、残された要素を焦点化することができる。

Das Auto fährt. (車が走っている。)

2. 〈移動するもの〉が〈移動をもたらすもの〉を伴う場合

主格 = 〈移動をもたらすもの〉 対格 = 〈移動するもの〉

※ 〈空間規定〉〈手段〉は随意的な要素であり、前置詞句などに現れる。

※ 〈移動するもの〉〈移動をもたらすもの〉は「有生」「無生」のいずれの場合もある。

Ich fahre ihn mit dem Auto in die Stadt. (私は彼を車で町まで送る。)

Der Autobus fährt die Kinder. (バスが子供たちを運ぶ。)

Der Lastwagen fährt Holz zu der Baustelle. (トラックが材木を工事現場に運ぶ。)

※ 〈空間規定〉が〈着点〉である場合、文意味が結果に転じる場合がある。〈空間規定〉の位置に〈結果〉が現れる場合や、さらに〈移動するもの〉が〈結果を被るもの〉に転じる場合がある。

Er hat das Auto gegen eine Mauer gefahren. (彼は車を壁にぶつけた。)

Er hat seinen Wagen schrottreif gefahren. (彼は運転を誤って車をめちゃくちゃに壊した。)

Er hat das Kind tot gefahren. (彼は子供をひき殺した。)

※ 〈空間規定〉の位置に〈様態〉が現れることがある。

Er fährt seinen Gast gut. (彼は客を巧みな運転で運ぶ。)

※一部の意味要素を削除することにより、残された要素を焦点化することができる。

Er fährt gut. (彼は上手に運転する。)

参考文献

Helbig, Gerhard / Schenkel, Wolfgang (1991): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. 8. Aufl. Tübingen: Niemeyer.

Schröder, Jochen (1993): Lexikon deutscher Verben der Fortbewegung. Berlin/Leipzig: Langenscheidt /Verlag Enzyklopädie.

Schumacher, Helmut et al. (2004): VALBU – Valenzwörterbuch deutscher Verben. Tübingen:

Narr. (Studien zur deutschen Sprache 31)

Sommerfeldt, Karl-Ernst / Schreiber, Herbert (1996): Wörterbuch der Valenz etymologisch verwandter Wörter: Verben, Adjektive, Substantive. Tübingen: Niemeyer.

Zaima, Susumu (1987): 'Verbbedeutung' und syntaktische Struktur. In: Deutsche Sprache 1/1987, S. 35-45.

岡本順治他 (編) (2003): いわゆる「分離動詞」をめぐって. 日本独文学会研究叢書023号.

国松孝二他 (編) (1985): 小学館 独和大辞典.

成田 節 (2004): 文構造と動詞 — 日本語と対照しながらドイツ語の特徴を探る —. 河崎靖他 (編) 『ドイツ語学の諸相』 郁文堂. S. 75-88.

吉田光演他 (2001): 現代ドイツ言語学入門 — 生成・認知・類型のアプローチから. 大修館書店.